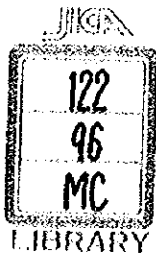


タイ国立ラマチボディ医科大学に関する
医療調査報告書
—眼科研究部門設立について—

昭和43年7月



海外技術協力事業団
Overseas Technical Cooperation Agency

國際協力事業団	
受入 月日 '84.3.22	122
登録No. 01407	96 MC

東北大学医学部講師
仙台市立病院眼科医長
福士 克

I 目 的

1968年中に竣工予定のタイ国バンコック市ラマチボディ大学病院の眼科部門設立に関してタイ国政府より協力要請があったので本件についてコロンプ計画に基づく眼科専門家の派遣並びに機材供与による医療協力事業の実施に先立ち、現地において事前調査及びタイ側関係者と打合せを行なった。

II 調査事項

- (1) ラマチボディ(以下「ラマ」と略す)大学病院眼科の研究並びに臨床設備の状況
- (2) 上記に関連する他部門との関係事項
- (3) タイ国眼科の基礎的並びに臨床研究の現状
- (4) その他上記目的を完遂する為に必要と思われる事項
- (5) 専門家の為の住宅設備等の状況

III 調査日程

1968年5月23日(出発日)より5月30日(帰国日)まで8日間にわたりバンコックに滞在し、この間、下記の日程に従い、施設を調査しタイ側関係者と打合せを行なった。最終的な結果は“RECORD OF DISCUSSION”として相互に署名し交換した。

5月23日(木)

9:00 A.M 羽田出発 JAL711

14:25 バンコック到着

直ちに眼科専門家紺山博士(プログラム診療団団長)とラマ大学眼科主任教授 Dr. Uthai Rutnin と今回の視察、調査日程の大略について打合わせを行なった。



5月24日(金)

午前; 1) SEATO, Medical Research Laboratory のラマ大学病院学長 Dr. Aree Ualya-Seili を訪れ, 大学建設の概要等について説明をきいた。

2) ラマ大学病院眼科視察

午後; Chulalongkorn大学病院眼科視察,

5月25日(土)

休日

5月26日(日)

休日

5月27日(月)

午前; ラマ大学病理学教室及び生化学教室視察

午後; Siriraj 大学病院眼科視察

5月28日(火)

午前; ラマ大学生化学教室を再視察

午後; ロックフェラー財団代表者と会見。同財団の学術援助の内容を知る

5月29日(水)

午後; 最終的な討論をラマ大学会議室で行う。

タイ側より学長の Dr. Aree, 眼科主任教室の Dr. Uthai, 日本側より眼科専門家の福士博士, 紺山博士並びにバンコック事務所長武田氏 OTCA 小野氏が出席。この結果は Record of Discussion と別項に掲げる。

5月30日(木)

午前; 眼科生化学研究に必要な利用しうる設備について, Dr. Bailey, Rockefeller Foundation, ラマ大学医学部と協議, 了解をうる。

午後; バンコック出発; 船団

IV 調査概要並びに結論

A discussion between the representatives of Ramathibodi Medical Faculty of Thailand and the medical specialists of Japan at the Department of Ophthalmology, Ramathibodi Medical Faculty, Bangkok, Thailand.

The discussion was held with members described as follows from 2.00p.m. to 4.30p.m. May 29, 1968 at the conference room of the Ramathibodi Medical Faculty.

A large number of discussion was held under an explored viewpoint by Dr. Suguru Fukushi, who stayed with a purpose of the exploration on the new establishing Ramathibodi Medical Faculty with a particular attention to the Department of Ophthalmology and their basic research facilities for a period of 8 days from 23rd of May to 30th of May, 1968.

All arrangements of Dr. Fukushi's exploration are provided by Dr. Uthai Rutnin, Acting Chairman of Department of Ophthalmology, Ramathibodi Medical Faculty.

Dr. Suguru Fukushi is expected to be a visiting professor in biochemical research and teaching project of Department of Ophthalmology, which will begin functioning in the next academic year.

Members precipitated on the discussion

Dr. Aree Valyasevi

Dean of Ramathibodi Medical Faculty
Thailand

Dr. Uthai Rutnin

Acting Chairman of Department of
Ophthalmology, Ramathibodi Medical Faculty
Thailand

Dr. Suguru Fukushi

Medical Specialist in Ophthalmology
Department of Ophthalmology, Tokoku
University Medical School,
Japan

Dr. Kazuichi Konyama

Medical Specialist of the OTCA,
Japan

Mr. Michio Takeda

Representatives of the OTCA in Bangkok,
Japan

Mr. Hideo Ono

A staff member of the OTCA in Tokyo,
Japan

The Content of Discussion

Request from the Japan to the Thai Research Facilities

The Completion of the Ramathibodi Medical Faculty had been expected on December, 1968, however, it is suspected to delay until approximately April 1969, because of the

postponing construction.

While the research laboratory of the Department of Ophthalmology had been provided in the Operating room of eye surgery, the Japan strongly requested to change the laboratory to the 'academic area,' where is designed to be a central research laboratory with a good basic equipment.

An air conditioner for the research laboratory may be provided by the Thai.

One technical assistant may be provided by the Thai for Dr. Fukushi from the starting year and an additional assistant may be arranged from the next year of the starting year.

The research laboratory provided to Dr. Fukushi will be equipped with a fume hood.

Running expenses of approximately 4000.-baths/month, may be provided to Dr. Fukushi, beginning from the new financial year 1969 in Thailand.

REQUEST FROM THE THAI TO THE JAPAN

Dr. Suguru Fukushi is suggested to share his own official hours to teach biochemistry of the eye and lead biochemical techniques for the 3rd residents of Department of Ophthalmology.

Equipments to a research and teaching for Dr. Fukushi must be supplied within a suitable budget from the OTCA.

Arrival of Dr. Fukushi for his mission has been expected at early in March, 1969 to begin his mission.

The Thai strongly requests to have a well qualified person of the same capacity as Dr.Fukushi who can continue his work,after Dr.Fukushi left from his mission. Mr.Takeda advised that a new application to the O.T.C.A should be made 6 months prior to his leaving.

A PLAN PROVIDED BY THE THAI FOR EDUCATION OF
RESIDENT TRAINING OPHTHALMOLOGY DURING THE PERIOD OF
COOPERATION WITH THE OTCA UNDER COLOMBO PLAN

1 st year	Basic training of Ophthalmology in Japan
2 nd year	Clinical work in Department of Ophthalmology,Ramathibodi Medical Faculty.
3 rd year	Same as the second year and the training of basic and clinical research in Ophthalmology.

Recorded by Dr.Snguru Fukushi

May 30 , 1968

Signature

Arec Valyasevi, M.D.

Uthai Rutnin, M.D.

Suguru Fukushi, M.D.

Kazuichi Konyama

Michio Takeda

Hideo Ono

1. ラマ大学病院の研究設備

一般にタイ国政府の基礎研究に対する予算支出は、極めて少なく年1,000ドル以下が多い。本大学もその例外でないので政府からの援助は殆んど期待出来ない。

コロンボ計画に基づく日本政府の協力は主として機材供与であり、消費材(Running Expenses)は含まれないのであるが、この点が派遣専門家が研究活動を行う上で、最も重要な事項であるので早急に何らかの具体的対策が予算の面から強く望まれる。

2. 専門家派遣の時期

ラマ大学病院開設は当初1968年12月からの予定であったが、予算の獲得、資材の調達の関係で大幅に遅延し、早くて1968年8月頃と予定されている。従って、要請された眼科専門家派遣は初めは、1968年7月の予定であったが、実際の派遣は1969年2月又は3月頃が望ましい。

3. 眼科生化学研究室

ラマ大学病院眼科生化学研究室として、附図の如き部屋を予定していたが、視察の結果、電気コンセント3ヶ、水道管1本のみで、他の装置は全く備えていない。加えて、その部屋は手術室内にある為、動物実験は出来ない等、生化学研究室としての機能を全く具備していないので、早速、部屋変更を申し入れた。協議の結果、ラマ大学病院八階のいわゆる "Academic area" に研究室を作る事に決定した。Academic areaは、中央システムの研究室で高価な器械は中央システムで互いに使用でき、低温室、蒸留水等の供給設備も附属する予定である。

但し、同研究室の開設は1968年8月より更に遅れるものと思われるので、上述の如き(月)印の専門家赴任後当初の1年間の活動は、生化学教室、Rockefeller Foundation, Medical & Natural Sciences, Faculty of Medical Sciences の一室で行なわれる予定である。

この研究所は、ラマ大学生化学教室に相当するもので、米国ロックフェラー財団の大幅な援助により、主として米国人の手によりその主導権は握られている。Dr. James A. Olson マイアミ大学教授を主任教授に米国人

スタッフ4名(来年は8名)、タイ国人研究者並びに助手40名がその構成人員である。将来この研究所で、タイ国で初めてのPh.Dの学位を出す予定で、その設備は最高のものである。

協議の結果、眼科専門家到着後、当初の1年間は、1名のTechnicianを眼科研究室に配置する予定である。第2年目は2名に増員の予定である。

4. 他大学病院眼科の現状

バンコック市内に大学病院は2つある。その一つは有名なSiriraj病院他の一つはChulalongkorn病院である。両病院とも、現在、基礎的研究設備は全くなく、一般的な臨床(眼科的)検査と手術が出来る程度のものである。現在眼科臨床教育に当たっている人の多くは、米国で教育を受けており、教科書、専門用語はすべて英語に依っている。最近、自国語の教科書による教育も行なわれようとしているが、医学生の数も少なく、本の出版に当たっても余程の国家援助を要するものと思われる。洋書は高価なので、多くの学生は教科書としてタイプでプリントしたものをもって講義を受けている。

a) Siriraj 大学病院眼科

タイ国最大の大学病院眼科である。外来は1日150名、午前中のみで、日本と同じくNo appointment制;入院85名中15名がPrivate Patientで他の70名は施療患者で無料であるので病院の収入にはならない。入院の70%は白内障、他は外傷、斜視、緑内障患者との事。スタッフは12名で手術は毎朝行なわれ、1日10名程度である。1日の外来数の中40名は入院希望であるので、かなりの長時間(2ヶ月から3ヶ月)待たないと施療患者は入院出来ない。

興味あるのは、原因不明の主として両眼性の視神経萎縮があり、外来総数の約2.5%に当るといわれる。本症については在タイ国眼科専門家の紺山博士が主になり、その解明に当る予定である。初めは、まず、疫学的にその原因の究明にあたるが、大体の見当がつけば、更に生化学的或は細菌学的その他の基礎的見地より研究に入る予定が立てられている。

b) Chulalongkorn大学病院眼科

本院は以前、赤十字病院であつた。外来は1日150名で、Siriraj病院と同じく午前中のみ。入院40名中Private Patientは5名、施療患者35名である。施療患者は一部屋6名が定員。白内障患者が圧倒的に多い。スタッフの数は4人でかなり多忙の様であつた。

この国ではトラコーマは、大して重要な眼疾患とは考えられない程多く、地方に行けば100%の感染率も珍しくないとのことである。

当院では一年前よりEye Bankをやつており、眼球の供給は比較的良好とのことであるが、1ヶ月に1~2例程度である。本病院の主要器機は次の如きものであつた。

細隙燈顕微鏡	ハーグ・ストレート社製	2台	
キーラー倒像鏡		1台	
キーラー手術用顕微鏡		1台	
カール・ツァイス手術用顕微鏡		1台	
水晶体冷凍摘出器		2台	等と臨床的設備

の程度は、悪くはない。研究設備は、例に洩れず全くないが、今度4×3m位の小部屋で病理学の研究を行う予定とのことであるが、やはり臨床的研究の域を出ないものと思われる。

5. ラマ大学病院の眼科レジデント教育の予定

タイ国側は5年間の日本からの協力を要望しているが、これは医学生教育よりも主としてレジデント教育に関するものである。

眼科レジデントは3年でそのコースを終える。即ち第1年目は9ヶ月間日本での基礎部門における教育を受け帰国し、第2年目は、これらの基礎知識を基本とした臨床教育並びに実習を行ない、最後の第3年目は、基礎的並びに臨床研究と第2年目の延長のコースを終えて、終了となる予定である。この計画は1968年4月より始つた。以上のコースを終えたレジデントは将来出来るだけ教職または研究者コースへ進むことを強く要望されるが、研究者は給料が安く(2500バーツ以下)自分でPrivate Clinicをもたなければ、生活出来ないのが現状である。しかも、その研

究費は前述の如く1000ドル以下では、実際問題として研究を行なうことは不可能に近いわけである。

この点はできるだけ早く大幅に改善されなければ、今回の日本側の技術協力も、一時的のものに終わる公算が極めて大きい。関係機関の努力を強く要望したい。

6. 派遣専門家の生活—主として住居について—

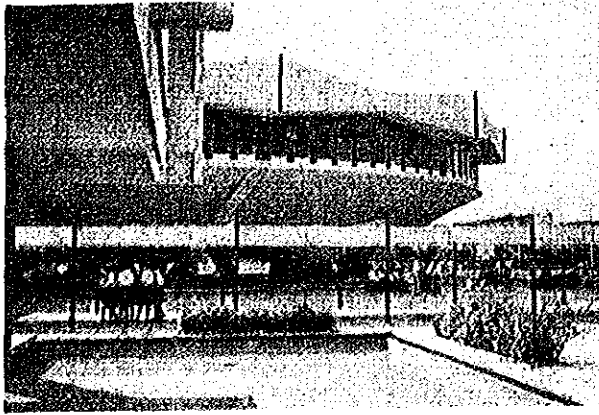
専門家1人当月4000バーツの住宅援助がタイ国側より約束されているが、最近、ベトナム戦争の影響で米国人の多数バンコックに住んでいるため、部屋代或は家賃が、非常に高くなった。これら状態よりみて、月4000バーツの住宅供給費では不足の様である。少なくとも月1000バーツの増額を必要とする。



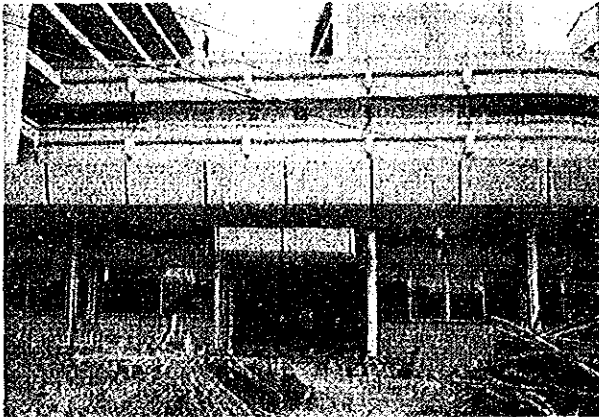
左より Dr. Uthai Rutnin(眼科主任教授)
Dr. Aree Valyasevi(Dean)
福 士 克 (眼科専門家)
紺 山 和 一 (眼科専門家)
SEATO Medical Research
Laboratory の Dean の Office で。



Dr. Uthai 後任ラマ大学医学部
基礎部門



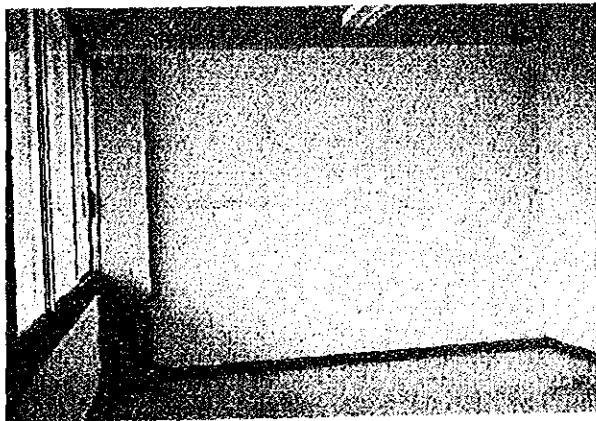
ラマ大学の食堂



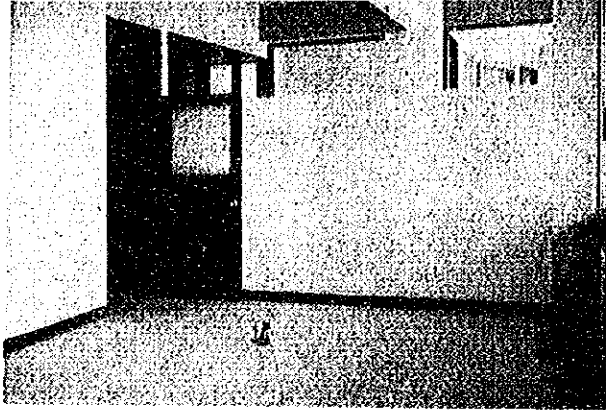
江戸中のラマ大学病院正門



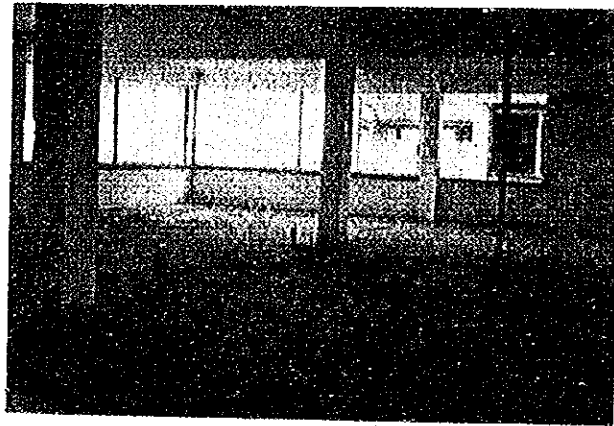
工事中のラマ大学病院



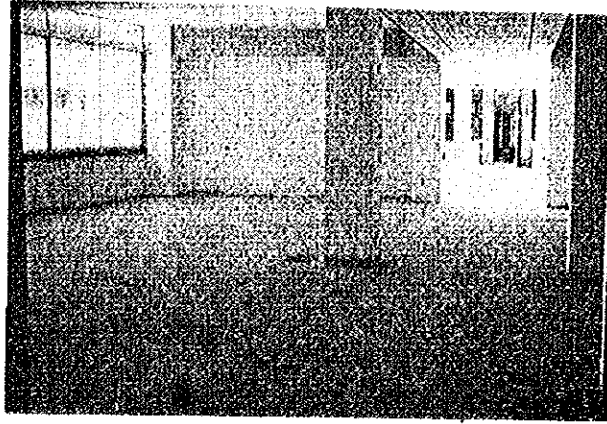
予定されていた手術室内の眼科研究室



同上



いわゆる「Academic area」中央研究所
ラマ大学病院



Academic area の一部
(研究者の Office とする予定場所)



最終討論の一幕

左より 武田 道夫 (OTCAバンコック事務所長)

福士 克 (眼科専門家)

紺山 和一 (眼科専門家)

Dr. Aree Valyasevi , Dean of Faculty of
Medicine & Ramathibodi
Hospital

Dr. Uthai Rutnin , Professor, Department of
Ophthalmology Faculty of
Medicine & Ramathibodi
Hospital

